

4. 日本放射線技術学会の概況と All Japan Radiologyでめざす 放射線診療の将来像

石田 隆行

日本放射線技術学会代表理事 /
大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

医療を取り巻く環境は急速に変化している。超高齢社会の進展、医療人材の不足、人工知能(AI)をはじめとする科学技術の導入による高度化、そして、医療DXの加速といった要因は、放射線診療にも大きな影響をもたらしている。こうした時代において、放射線診療が国民に質の高い医療を安定して提供し続けるためには、放射線にかかわる職種の高度な専門性と連携体制がこれまで以上に重要になる。そのために設立されたのが、「放射線診療4団体連絡協議会(All Japan Radiology)」である。放射線診療4団体連絡協議会は、日本医学放射線学会(JRS)、日本放射線科専門医会・医会(JCR)、日本診療放射線技師会(JART)、日本放射線技術学会(JSRT)で構成される協議会であり、この4団体が力を合わせて、放射線診療の将来像を共有し、課題解決と発展を通じた医療への貢献をめざしている。放射

線診療において、放射線科医が診断・治療を行うために、最適な画像や診断に必要な情報を提供するのが診療放射線技師の職務であることから、日本放射線技術学会は、それを果たすための臨床における創意工夫や放射線診療に役立つ研究を積み重ねていくことが果たすべき大きな役割となる。それに加えて、高度医療を牽引する放射線診療の中で、放射線技術を今以上に進歩発展させることをめざして、AI、8Kスーパーハイビジョン技術である高解像度・広色域・高フレームレートなどの映像技術、ロボティクスなどの先端技術を取り込んだ次世代放射線技術の研究にも積極的に取り組むため、学会の学際性を高め、多くの学会員が持つ臨床現場発のアイデアで未来の放射線技術を切り開くことにより、放射線技術学を進歩発展させていきたい。

日本放射線技術学会の概況

本学会の概況を説明する前に、少し歴史を振り返りたい。日本放射線技術学会は、1942年に放射線技術の進歩発展を目的として創立された学術団体である。当初は診療現場で働く技術者間の技術情報交換が主であったが、戦後の医療技術の進展とともに、その活動範囲は急速に拡大し発展していった。本学会創立の中心的な功労者である梅谷友吉先生は、日本放射線技術学会雑誌第3巻第9号の意見論述「羊頭を掲げて狗肉を売ることなかれ」に、学会運営の留意すべき点を述べられている。その中で非常に印象深かったのは、学会は学問中心主義を強化し、会員にとって有益な機会を提供すべきである、と説いておられることである。梅谷先生ご自身も、臨床現場での「思いつき」から研究を行い、数多くの学術論文を発表されている。また、日中現像可能X線感光板、断層撮影用フィルムマーク、層厚計測器付X線制御装置などの独創的考案で、特許19件、登録実用新案6件を取得し、特許庁長官表彰を受賞されている¹⁾。放射線技術が、放射線技術学という学術として進歩発展していく時代の始まりであり、この考え方が現在の日本放射線技術学会にしっかりと根づいている。

ここから、日本放射線技術学会の現状を述べる。学会の学術事業の大きな柱は、学術大会の開催と学術論文誌の